

# 読んでみたい この一冊

大阪産業経済リサーチ & デザインセンター  
主任研究員 佐野 浩

## 『ザ・ワン・デバイス』

ブライアン・マーチャント (Brian Merchant) 【著】、倉田幸信 【訳】  
ダイヤモンド社 2,000 円+税



21世紀になって20年ほど経過するが、21世紀の大発明といったら何を思い浮かべるだろうか。おそらく誰もが思いつくのは、「スマートフォンの発明」ではないだろうか。スマートフォンは驚くほど短期間のうちに世界全体に普及するとともに、世の中の在り方を大きく変えた製品である。例えば、仕事場においても、かつては、電話に、パソコンに、連絡帳に、スケジュール帳など、様々なものが机の上にあふれていたが、現在では手のひらサイズのスマートフォン内ではほぼすべての事が完結するようになり、場所の制約がなくなって、どこでも仕事ができるようになった。また、現代人にとって、何をやるにしてもまずはスマートフォンをいじるというように、もはやスマートフォンは生活の一部にもなっている。

このように世の中を大きく変えたスマートフォンであるが、そのきっかけとなったのは2007年にデビューした「Apple社におけるiPhoneの開発」であろう。本書は、この革新的な製品となったiPhoneの誕生秘話などについて、開発に携わった人のインタビューだけではなく、構成部品や製造工場に至るまでの幅広い分野における取材を行い、世界を変えるきっかけともなった奇跡の製品がいかにして生みだされたのかを紹介している本である。

むろん、iPhoneの開発には様々な困難があったことは容易に想像がつくものである。本書の中にも、技術的・スケジュール的な困難さ、Apple社における技術開発の秘密主義制、はたまた当時のApple社CEOのステイブ・ジョブスに関する数々の逸話、iPhoneの開発におけるApple内の社内政治のドロドロとした部分についても詳細に書かれている。内容は本書を見ていただくこととして、本書の中で指摘している重要なことを3点取り上げてみたい。

一点目としては、iPhoneの開発には、「時の運が重要であった」ということである。何を当たり前のことと言っているのかと思われるかもしれないが、類似の商品として、1994年にIBM社が開発した「サイモン」という製品、1997年に発売されたPalm社の「PalmPilot」、あるいはApple社が開発した「Newton」といった製品があったものの、iPhoneのように普及しなかった。その理由を考えてみると、技術面だけ見ても、コンピュータチップ、通信技術、マルチタッチ、カメラ、バッテリーなど様々な要素技術がなかった、もしくは未成熟であったことが指摘できる。iPhoneに搭載されている技術はというと、実際はその当時にあった技術の寄せ集めといった面が大きいのだが、それらの要素技術が製品として使えるレベルまでに成熟化していたことが、iPhoneの開発がうまくいった一つの要因であろう。

二点目として、たとえiPhoneに搭載されているのは既存技術の寄せ集めであったにしろ、それらの要素技術の発明から製品化、成熟化には長い年月を経ているこ

とが指摘できる。言わば、爆発的な普及とは裏腹に、技術開発にはかなりの助走が必要であったということである。加えて、思い付きやアイデアの寄せ集めを実際に製品へと昇華させるためには、デザイナーやエンジニアの工学的知見などが鍵となるが、ここでも開発者の知識・経験といった長い年月かけて蓄積されたものが重要であり、技術は一長一短には構築されないということは言うまでもないことであろう。そのため、iPhoneの開発には「これまでの技術の蓄積」が非常に重要であったことが、本書の重要な指摘として挙げられる。

三点目として、そのような「時の運」や「技術蓄積」があるにしろ、最後に革新的な製品へまで押し上げるのは人であり、「開発者の熱意」が非常に重要であったことである。妥協しない心や、問題に臨機応変に対応するなど、寝食を忘れ、人生までもかけた開発者の熱意がなければ、このような製品は生まれていなかったであろうことである。実際、インタビューの中でも、開発に携わった多くの人はその後数年以内にApple社を退職する人が多いものの、あの体験は非常に有意義だった、家族や健康は犠牲になったものの、あれほどの体験はそうそうできない、という声が多数見受けられている。

さて今後の日本においては、イノベーションが重要であるということは言うまでもないことである。本書を通じて、21世紀の大発明となったApple社のiPhoneの開発から、イノベーションにおいては、「時の運」とともに、「普段からの技術蓄積」や「開発者のあくなき情熱」が不可欠であることを見てきたが、果たしてこれらの条件は現在の日本では十分ではあるのかという面では、非常に心もとなく感じられる。イノベーションは無からいきなり生まれるものではなく、実際には製品化に至るまでの長い助走があり、イノベーションとして結実するのは成功例の一部、様々な研究開発のほんの氷山の一角にしか過ぎないものである。成果主義へと急速に変化しつつある日本社会において、成果の見えない投資を続けられる余裕があるかという面は、特に懸念する部分である。

本書は、Apple社のiPhoneといった、世の中の在り方を短期間に大きく変えた製品であっても、イノベーションを起こす基本条件は変わらないということを改めて感じさせてくれる本である。

### 【原著者紹介】

ブライアン・マーチャント (Brian Merchant)  
ジャーナリスト、編集者。デジタルメディア“VICE”系列の科学技術雑誌「マザーボード」で記者、編集者を務めつつ、同系列のオンライン・フィクション雑誌「テラフォーム」を創設。また、ガーディアン、スレート、ワイアード、アトランティックなど多数の有力誌に寄稿している。